

暗いクリスマス

妹のハリマは病棟に取り残されていた。らい反応がくりかえし体を痛めつけていた。喉頭浮腫で声がかすれ、しばしば呼吸困難と肺炎に陥った(その当時、らい反応の特効薬は手に入らなかった)。「殺してくれ」という痛々しい叫びも無視して病状の収まるのを待つ以外になかった。私が密かに抱いていた暗い自問は、このまま重症肺炎に陥らせて死を待つべきか、何とか生きながらえさせるかという事であった。これを冗談で紛らわせて患者に気休めを述べるのは容易ではなかったのである。

数ヶ月の後、たまりかねた私は、ついに気管切開にふみきった(気管切開とは、喉に穴を開けて、直接気管から薬に呼吸が出来るようにする手術である)。当然、患者は呼吸困難からは解放されたが、声を失った。同時に、それはまともな社会復帰が困難になったことも意味していた。

ハリマという患者、ハリマという一個の人間はこれで幸せだったのだろうかという疑問は、しばらく自分を暗い表情にしていた。また、その当時のアフガニスタンとペシャワールの状況は余りに絶望的であり、「人間」に関する一切の楽天的な確信と断定とを、殆ど信じがたいものにしてきたからでもある。まるで闇の中から激しく突き上げてくるような、怒りとも悲しみともつかぬ得体の知れない感情を私はもて余していた。人間の条件——乏しい私の頭脳で答えを得ることは到底不可能であった。だがおそらく当時のハリマという患者自身もこの疑問を共有していたに違いない。「イスラム」以外に語る言葉をもたぬ者には、その率直な泣き叫びそのものが雄弁であった。



自分もまた、患者たちと共にうるたえ、汚泥でまみれて生きてゆく、ただの卑しい人間の一人に過ぎなかった。ただひとつ確信できたのは、小器用な理屈や技術を身につけてドクター・サーブと尊敬されていても、泣き叫ぶハリマと全く同じ平面にあるという事実だけであった。

この一九八五年の暗いクリスマスを私は一生涯忘れることができない。ソ連軍はペシャワール近郊のカイバル峠に迫っていた。峠のてっぺんでは激戦が展開され、負傷者を乗せた車が連日連夜、市内の各病院と峠とを往復していた。市民たちは絶えざる爆破工作におびえていた。冬の雨季に入ったペシャワールの空はどんよりと鉛色に曇り、砲声が間断なく市内まで聞こえていた。ふるさとに帰れぬ者、ふるさとを失った者たちが病棟とベランダにあふれていた。収容しきれぬために一部はテントにベッドを入れて寝かせていた。

当時所属していた或る海外医療協力団体からは、はるか離れた国外で行われる「重要会議」に出席するよう矢の催促が来ていた。

「発展途上国の現実に立脚して海外ワーカーとしての体験を分かち合い、アジアの草の根の人々と共に生きる者として……。美しい自然と人々に囲まれたアジアの山村で語らいの時間を……」

白々しい文句だと思った。美しく飾られた言葉より、天を仰いで叫ぶハリマの自暴自棄の方が事実だった。この非常時に患者たちを二週間以上も置き去りにする訳にはいかなかった。が、このペシャワールの状況を日本側に伝えるのは至難の業でもあった。無駄口と議論はもうたくさんだ。最後通牒のような「出席要請」を力を込めて引き裂いた。私は、催しものと議論づくめの割に中身のない「海外医療協力」と、この時決別したのである。

